

## 【展覧会記録】

# 特別展「HISTORY OF MUSEUM－れきはくの“これまで”と“これから”－」関連講演会より 丹下健三と兵庫県立歴史博物館と

沢 田 伸

本稿は、2023年4月22日に兵庫県立歴史博物館にて開催した講演会「丹下健三と兵庫県立歴史博物館と」の記録のため、講師の許可を得て、当館による文字起こしと講師による加筆修正を行ったものである。

### (1) 昭和55年(1980)当時の兵庫県営繕課

私の方からは、昭和55年(1980)当時の兵庫県営繕課の様子と、私が担当した当館の実施設計についてお話したいと思います。ご存知のように、役所の組織というのは課長の下に係長が何人かいて、その下に担当者がつくというような形です。担当者でも上から主査や主任や吏員というような職名があります。私は当時はまだ吏員でした。そういうある意味ピラミッド形の組織ではありながら、兵庫県営繕課のいちばん大きな特徴というのは、当時では珍しく、設計を外部に出すのではなくて、内部で行うという方式をとっていた点です。これは全国の自治体の中でも兵庫県ぐらいじゃなかったかなと思います。小さな設計事務所がいくつか集まっているのが営繕課だと思ってください。民間の設計事務所と違うのは、所長にあたる係長がデザインを指示したりコントロールしたりすることはありません。ワンマンコントロール方

式といって、仕事を各担当に全部割り当てますが、担当が決まると、基本設計から実施設計、工事監理にいたるまで、始めから終わりまで原則として一人の人間が担当するという方式が採られていました。もちろん、大きくて複雑な案件は経験豊かな人がやって、小さくて簡単なものは入りたての経験の浅い人間が担当することになります。

丹下事務所のように、その人の適性を見極めて人を貼り付けるというやり方とは異なる方式です。兵庫県営繕の場合、技術をまず最低限個人に蓄積しないといけないという考え方と、設計だけやって現場を知らない人間というのはダメだという考え方があったと思います。

それだけですと、課員がバラバラに仕事をしているように見えますが、「アンザル会」という、いわゆるヒラの職員が係を超えて自主的に作った組織がありまして、それぞれが現場で悩んでいることとか勉強したいテーマを持ち寄ってお互いに交流するという、技術を共有するような仕組みまで作っていただいていた。ですので、営繕課に配属された当時、大学の研究室に舞い戻ったような印象を私自身持っておりまして、結構ものづくりが好きな人間ばかり集まっていて喧々諤々やりあっていたのを思い出します。

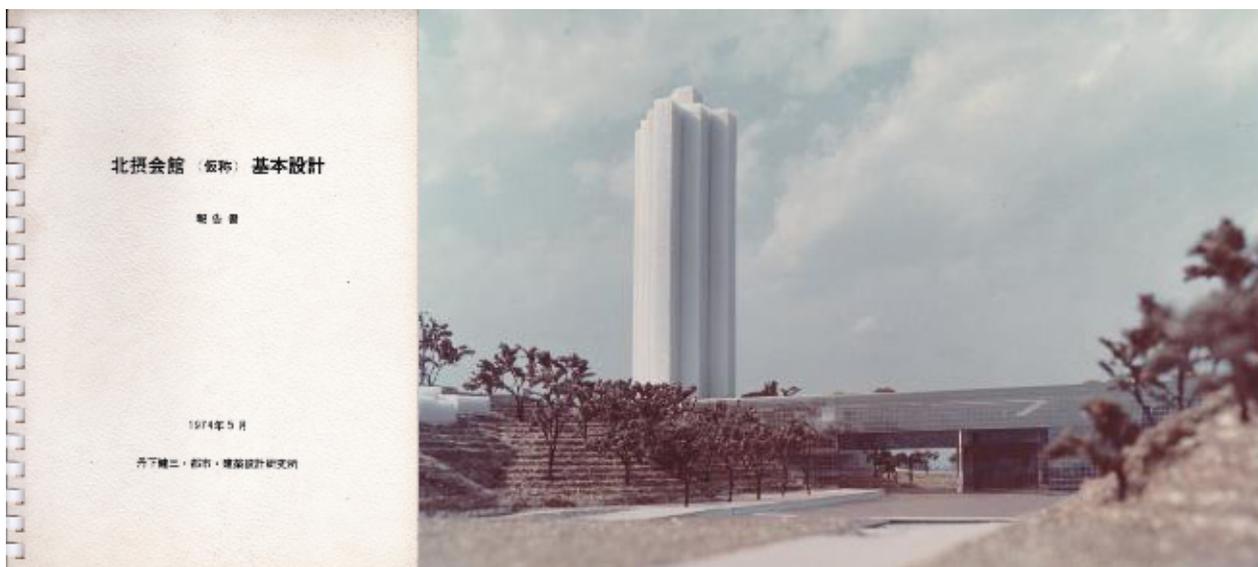


図1 北摂会館（仮称）基本設計

そして年度末になると、来年度の仕事が大体どんなものか来るかというのが見えてくるんです。例えば美術館とか劇場であるとか、県の目玉事業というのが見えてくる訳です。そうすると、自分たちの係に良い仕事を取ってきてくれということで、年度末には我々が資料を一生懸命集めて係長に渡すんです。例えば博物館をわが係に引っ張ってきてくれとお願いするんですね。今回の場合、上手くいきました。博物館を取ってきてくれました。しかも私が担当だということで、非常に喜んだ訳です。

## (2) 兵庫県立歴史博物館の基本設計について

ところが、坂井知事のほうから「基本設計は営繕課ではなく、丹下さんをお願いするんだ」という話が出てきたんです。私は担当になって基本設計から工事監理まで担当出来ると思っていたのに、丹下さんに横取りされたような気持ちに正直な訳です。なぜだろうと話を聞いていきますと、当時兵庫県が推進していた北摂三田ニュータウンのフラワータウンの中に北摂会館というのを建てるという計画があって、基本設計を丹下事務所をお願いしていました。1974年にはすでに丹下事務所として基本設計の報告書が提出されていました。どのような建物かと言いますと、深田公園というところにブリッジを渡して、その両側面に下までガラスのカーテンウォールを設けます。ブリッジのところには店舗などを配置し、ガラスのカーテンウォールの中には展示施設を設けるといふような形で構想されていました。ところがなかなかニュータウン開発が上手くいかなくて人口も増えていかないなかで、この計画は橋の部分だけしか実現しませんでした。1980年当時、このことを知事もかなり気にされていたみたいで、「丹下さんには借りがあるんだ」といふようなことを聞きました。(図1)

ところが、借りがあるから基本設計をお願いするというのは良いのですが、どうも設計料が安かったみたいです。こんな話が出てきます。「沢田さんを数ヶ月貸してほしい」と。確かに建設省(当時)の設計の料率で計算すると、半額とは言わないまでもかなり低い値段だったんです。私の給料を数ヶ月分充てても穴埋めできないぐらいの金額で基本設計をお願いしているんですね。借りを返すと言いながら……。そんなところから、私を貸してくれという人質みたいな話になるのですが、私自身、内心想いました。「これはいい話だ。丹下さんのところに行ったら一緒に仕事ができ

る」と喜んだんです。ところが、これがなかなか上手いこといきません。

どうして丹下さんのところに行きたかったのかというと、ちょっと当時の状況を振り返ってみますと、いわゆる近代建築の巨匠と言われているフランク・ロイド・ライト、ミース・ファン・デル・ローエ、それからコルビュジェなどは私が学生の頃にはすでに世の中にはなくて、日本ではその影響を受けた人たちが元気でした。坂倉(準三)さんは早くに亡くなっていましたが、丹下先生に前川(國男)先生も働き盛りというところでした。特に学生の頃、この人たちが私たちにとってのテキストというか見本のような存在でした。なかでもコルビュジェと丹下さんは割ととつきやすかった。というのはコンセプトの立て方がすごくわかりやすい。それがどう空間に反映しているのかも読み取りやすかったので、非常に取り組みやすい人ではありました。(本当はそんな浅いものではなく、もっと深い部分があるんでしょうけど。)

堀越さんも言われていましたが、丹下先生は戦後からバリバリ活躍されていて、50歳前後の頃になると、もうすでに「世界のタンゲ」と言われるような名声を博していました。ちょうどこの歴史博物館の基本設計をお願いした頃には文化勲章まで受章されています。そういうなかでこの仕事をやることになった訳でして、私としては「丹下事務所に行ける。」というのは非常に美味しい話ではあります。

ところが、諸般の事情から行けなくなりました。私には歴史博物館のほか、15億ほどのプロジェクトの設計が1つと小さな工事ですけど設計の仕事が2つ3つありまして、それ以外に、現場監理の仕事が3つ4つ割り当てられていました。私は「丹下事務所に行ってもいいです」って言うと、「何を言っているんだ。お前の仕事を誰がやるんだ」と怒られまして、まあそういう理由で丹下事務所行きはポシャりました。

丹下事務所行きはなくなりましたが、最終模型の一つ前の模型が完成した秋頃に、初めて草月会館の丹下事務所にお邪魔しました。先ほど堀越さんから紹介があったように、真ん中に模型が置いてあって、その横で所員の方が図面を書いている。そこに丹下先生が入っていくと、非常に緊張した空気が流れるのを目の当たりにしながら、いろいろと説明を受けました。恐らくその時の話だったと思うのですが、丹下先生から「一分の一模型で実験をされる建築家もおられますけれども、私は百分の一とか二百分の一の模型で実験しますから

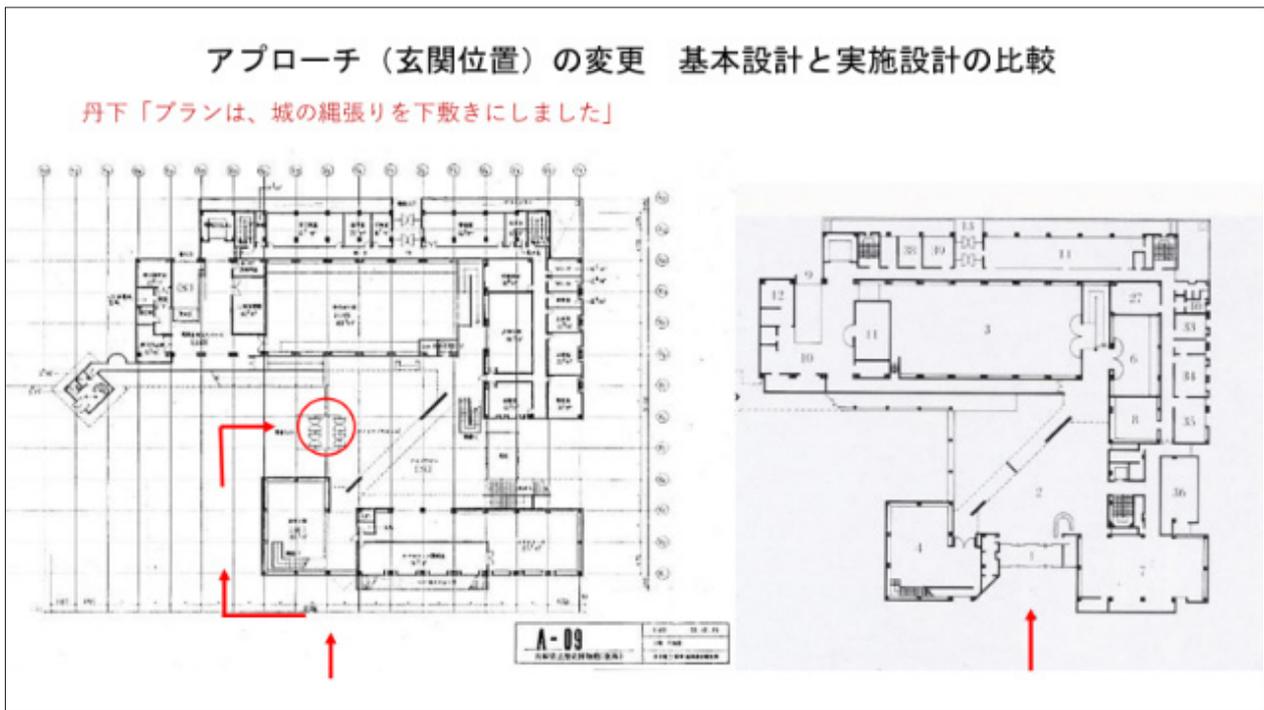


図2 県立歴史博物館 基本設計と実施設計の比較（1階平面図）



図3 県立歴史博物館 基本設計模型写真と竣工写真

ご安心ください。」といわれました。一分の一模型というのは現場での変更です。丹下さんはそんなめちなことは言いませんよという、非常に紳士的なお話しをしていただきました。それと、今回の仕事に関しても、「設計の意図は十分にご理解いただいたと思うので、あとはお任せします」と言っていたいただきました。

### (3) エントランスの変更

そういうふうにして基本設計が進んで行って、12月に成果品が我々の手元に届きました。成果品にはこういった平面図とか立面図とか断面図とか、それと主要な部分の矩計図とって断面図の詳細図みたいなものが模型とともに送られてきました。それをもとに、いわゆる工事発注が出来るような図面を描くっていうのが実施設計なんですけれども、それを私が担当した訳です。基本設計が12月に納品され、1月から私は実施設計に入りました。最近、ここの博物館に私の印鑑が押してある設計原図が保存されているというのがわかりまして、調べてみたら意匠図だけで73枚ありました。それを2ヶ月ぐらいで描いたということになります。

実施設計も大詰めを迎えた3月上旬だったと思います。問題が起きました。あとは積算をすれば良いというところの、ほぼ手前まで来ていた頃に、営繕課長あてに丹下さんから電話が入りました。内容は私には聞こえてないのですけれども、たぶんこうだろうなという会話です。丹下さんの方から、西面にある玄関を南側に変更したいのだ、というような話が出てきたようです。それで、課長の「スケジュール的に無理です」という声が聞こえていました。それでもどうも丹下さんは粘っているみたいで、そこをなんとかと言っているようでした。それでも「無理です」と課長は断っています。たぶん沢田がこれ以上きつくなったら潰れてしまうと思ってくれたのか、断り続けていました。しばらくの沈黙の後に、丹下さんが、どうも「沢田さんと話をさせてくれませんか」と言ったんでしょう。課長が私に受話器を渡すんです。受話器を受け取って話を聞くと、「エントランス(玄関)を南側に変更したいんだ。あなたどう思いますか」という質問だったんです。「実は、私も西側の玄関は非常に気になっていたんです。むしろ南側の方が面白いです！」と答えたんですね。すると、間髪入れず丹下さんから、「ありがとう。じゃあやっただけですか」と。それにつられて私も、「あ、はい」と答えました。これが大変

なことの始まりでして、あと1ヶ月もない中で、図面を修正するわけですが。単に意匠図だけではなくて、構造にも迷惑をかけることになる。設備にも迷惑をかける。頭を下げ回って、丹下さんと約束したことを実現しようとしていたことを思い出します。

当時私自身は、歴史博物館の実設計の時間を確保するため、年度初めの5月ぐらいから毎月100時間ぐらい残業していました。丹下事務所からの基本設計を受け取った後、2ヶ月で実施設計を行ったときにも100時間の残業をしていて、もうぼちぼち普通の生活に戻ろうかと思っていたときに、また100時間オーダーの残業をする羽目になりました。それでもなんとか、6月の着工に向けて、すべてをやり終えました。まあちょっと大変でしたが痛快な時期ではありません。

ここで、西側の玄関がなぜ気になっていたのかについてお話しします。丹下さんから「当館のプランはお城の縄張を下敷きにしました」という説明を受けたのを覚えています。つまり城の縄張であれば、たぶん天守にたどり着くまでに時間と距離を稼ぐようなプランになるはずなんです。ということはつまり、当館の場合、まず南からのアプローチが決まっていたから、建物の南の壁に動線をぶつけて、それを西の方へ誘導したのち北側に迂回させる。さらに東へ回りこんで玄関にたどり着く。城の縄張から理論的に考えればそれが普通なんです。ところが、玄関を南に変更したいというお話になったんです。堀越さんから説明があったような「楼門」というような考え方や発想はあの時(実施設計時)の私にはなく、南から西に迂回させるとしたら、何らかの仕掛けを準備しないと来館者が迷うことになります。その問題を解決しようとするれば、例えば植栽などのいわゆる外構工事に対応する必要があり、ちょっとこれではまどろっこしいかなと思っていました。それを南に玄関を移すとなったら、これは非常に面白いなと思いました。ちょっと低い玄関をくぐって、吹き抜けの大空間の玄関ホールに入っていく。そこからガラスで西方向が全部見渡せる。さらにスロープのところまで行くとお城まで見える。たぶん空間体験の面白さのようなものも、なんとか取り入れないと丹下さん自身、自分で納得できなかっただろうなと思いながら図面修正を行っていきました。(図2、3)

基本設計の時に西側にあった玄関を、実施設計で南側に変更したために、平面計画を変更する必要が生じました。建物の南面付近にあったビデオ

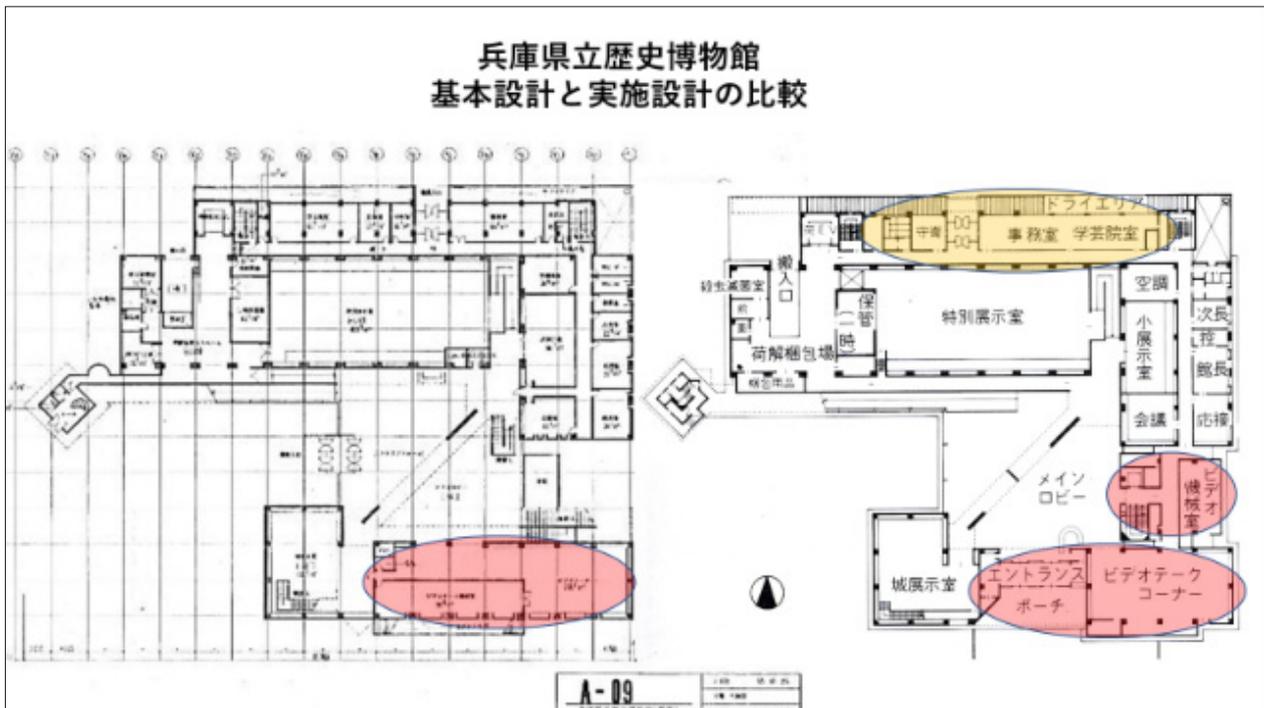


図4 県立歴史博物館 玄関位置変更に伴う平面計画の変更



図5 工事中の写真（県立歴史博物館と市立美術館）

テーク室（ビデオデッキのボタンを押すと、勝手にロボットがカセットを運んで来てくれて、その映像がモニターで見られるというような当時の最先端設備）を東の方に移動して、機械室もちょっと北側に移動するなどの変更を行いました。それにあわせて管理部門のところなども変更になっています。（図4）

#### （4）博物館の完成とその後の改修

私自身、この博物館の実施設計を終えた後、県の出先機関に転勤となり、工事監理に携わることはできませんでした。ですので、工事中の資料は手元にございせんが、面白い写真を見つけました。工事期間中に博物館をお城から撮った写真が2枚だけ博物館に残っていました。その日付を見ると1981年の10月18日。着工が6月ぐらいですから4ヶ月ほど経っています。昔からある保健所のとなりに博物館の敷地があります。地下の掘削工事をやっている最中で、土留め用の矢板が並んでおり、当時の工事の様子がわかります。それと南側にある市立美術館ですが、煉瓦造の建物をよく見ると屋根が取払われています。この写真から博物館と姫路市立美術館は同じ時期に工事をしていったんだというのが読み取れます。（図5）

まあそういうふうにして工事は進み、1982年9月に完成しました。写真は竣工写真です（図6）。姫路城天守からの写真が採用されているのは、丹下さんが姫路城との関係を重視した思いを表現しているように思います。

それから10数年経た平成19年（2007）の改修の時に、少しずつ変わっていきます。たとえばインフォメーションセンターは、もともとはエントランスのチケットブースに併設する形でカウンターがついていました。それが一番奥の方に行きます。さらに大きい変更点としては、このスロープの部分にエスカレーターが設けられた点です。バリアフリーが非常に重視されるようになってきた時に、延々とスロープを歩くというのは、ちょっと具合が悪いと考えられたようです。ここに双方のエスカレーターが付けば良かったのですが、登り一方のエスカレーターしか付きませんでした。それで上り下りできるようにエレベーターをその近くに設置しています。さらに決定的なのはビデオテークの部屋です。これが体験型の展示室に変わったり、トイレや会議室になったりしています。この辺りが大きな変化ではないかと思います。こういうふうにして、博物館は時代に即応するように変化を遂げていきます。

そして、今回（2022年）の改修でインフォメーションセンターが3度目の家移りをします。ちょうど玄関ロビーのど真ん中あたりに受付カウンターでできるようになった訳です。（図7）

#### （5）おわりに

丹下さんの作品である国立代々木競技場は昭和39年（1964）に竣工したのですが、2年前の令和3年（2021）に重要文化財に指定されています。広島平和記念資料館はもっと早く平成18年（2006）に重要文化財になっています。こういうふうには丹下さんの作品が50年あまりを経て文化財に指定されるようになったということから、私自身この兵庫県立歴史博物館も、竣工して50年以上、県民の皆さんに愛されながら文化財としても未永く使っていただければいいなと思っております。以上でございせん。どうもありがとうございました。



図6 竣工写真

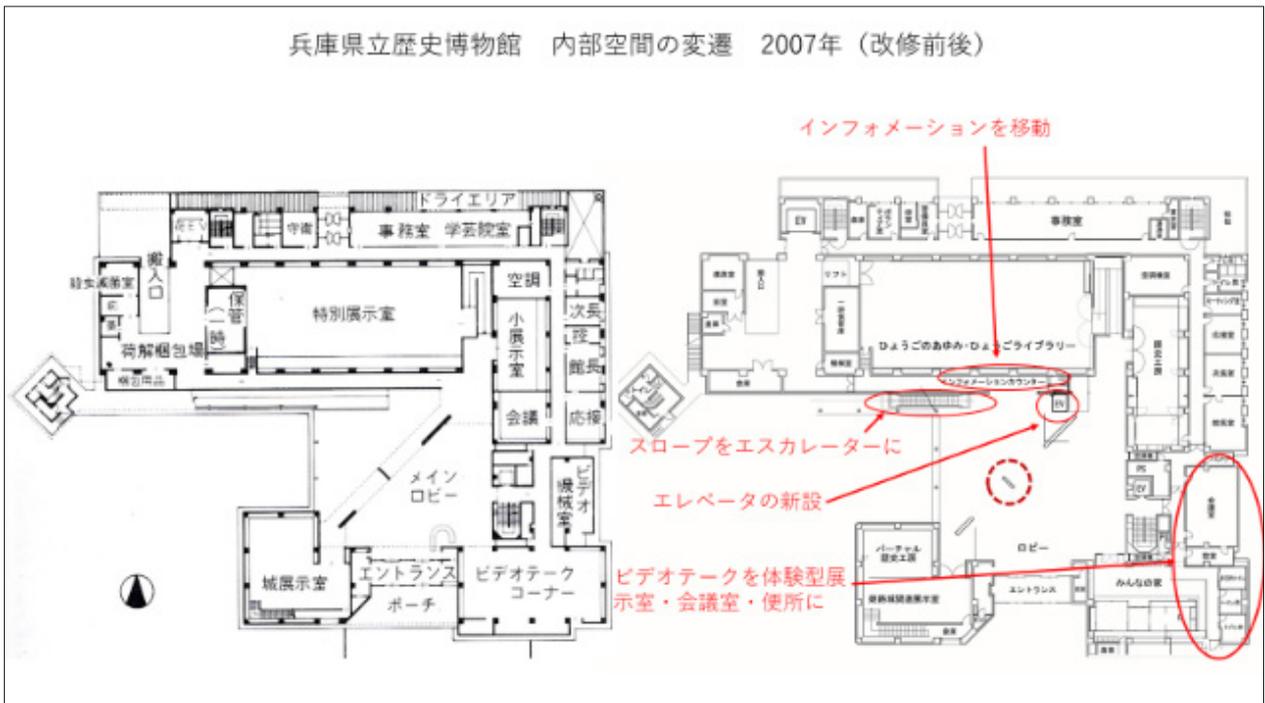


図7 竣工後の内部空間の変遷